

コタキナバル日本人学校における社会科の実践

前コタキナバル日本人学校 教諭

愛媛県松山市立雄郡小学校 教諭 菅 井 憲 人

キーワード 在外教育施設、コタキナバル、社会科、見学

赴任校の概要（2024年3月18日現在）

学校名・日本語：コタキナバル日本人学校

学校名・英語表記：Kinabalu Japanese School

URL：https://kjs1983sabah.wixsite.com/kinabalu-japanese-sc

1 はじめに

マレーシアは東南アジアの連邦制の君主国でイギリス連邦に属している。マレー半島の11州とボルネオ島北部の2州の計13州と連邦直轄領の3地域から成り立っている。コタキナバル日本人学校があるサバ州は、マレーシアで2番目に大きな州であり、ボルネオ島をサラワク、ブルネイ、インドネシアのカリマンタンと共有している。

サバ州には、ラフレシア、ウツボカズラなどの植物やオラウータン、テングザル、ボルネオゾウなどの絶滅危惧に瀕している動物も生息している。また、世界有数のダイビングスポットとして有名なシパダン島や東南アジア最高峰のキナバル山などがあり、自然豊かな場所である。

マレーシアの民族構成は、マレー系、中国系、インド系となっており、多民族国家である。ボルネオ島サバ州には、30を超える先住民族が存在しており、様々な民族が暮らしている。マレーシアの公用語はマレー語であるが、他に英語や中国語、タミル語を使う人たちもいる。さらに、ボルネオ島の先住民族たちは、これら以外にも自分たちの民族の言葉も使うことができる。

2 コタキナバル日本人学校について

マレーシアには、クアラルンプール、ペナン、ジョホール、コタキナバルと四つの日本人学校があり、コタキナバル日本人学校は、ボルネオ島で唯一の日本人学校である。

コタキナバル日本人学校は極小規模校で、派遣1年目の2021年度は、コロナ禍により全校児童生徒数が5名にまで減少したが、派遣2年目には、20名以上まで回復している。派遣教員は校長を含め6名で、教科担任制及び複式授業を行っている。複式授業は主に小学部を中心に、低、中、高学年の2学年ずつで分けているが、体育は小1～小4、小5～中3までの2クラスと大きく分けている教科もある。

3 実践例

派遣2年目から小学部3・4年部の社会科を担当した。小学校3・4年生の社会科では、身近な地域の安全を守るための活動や産業や消費生活の様子、生活環境を支える働きなどを理解し、調査活動等を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けさせるという目標がある。それらの目標を達成するために、それぞれの単元内容が自

分と身近なことであると捉えることが必要であると考え、様々な見学を計画した。そのいくつかを紹介する。

(1) 消防署見学

子どもたちにとって一番身近である、最寄りのリカス地区を管轄するリントス消防署での見学を行った。

見学では、コタキナバルの消防事情等について話を聞いた。消防署の職員数や、コタキナバルでの火事の件数、火事が起こった時の避難の仕方や消火器の使い方等を教えていただいた。ここまでは、日本で見学する際に教えていただける内容と同じような感じではあるが、マレーシアは日本と気候区分が異なり、高温多湿の南国であることから、日本と比べ火事の件数が少ないということが消防署の方の話で分かった。一方で、ヘビ等の動物の駆除や救助の依頼が多くあることも知ることができた。実際に現地のニュースで、こういった動物の駆除等のニュースを目にすることが多かった。また、マレーシアの救急搬送は、それぞれの病院が行うことがほとんどで、消防署から出動することはほとんどないことも教えていただいた。このように、子どもたちは、日本とマレーシアで、消防署の仕事の違いが多くあることに気付くことができた。

施設見学では、トレーニングルームや消防車などを見せていただいた。職員のサービス精神が旺盛で、消防車に乗せていただくだけでなく、サイレンを鳴らしながら実際に走行していただき、子どもたちは大興奮であった。また、放水や防火服着用体験もでき、消防士の仕事の大変さを体感することもできた。

ちなみに消防署見学は、学校の授業の一環だけでなく、休日に一般の人が消防署見学を申し込んで実施したり、子どもの誕生日パーティーを消防署で開催したりすることができ、日本との違いに驚いた。



防火服着用体験の様子

(2) 警察署見学

コタキナバル中心部の繁華街に位置するコタキナバル警察署に見学に行った。消防署見学と比べ、担当者との打ち合わせに時間を要した。まず、コタキナバル警察署とは別の警察本部で打ち合わせを行い、許可を得る必要があった。その際、同行したマレーシア人スタッフは入館する前に、受付でIDを提示し預けるなど、厳重な雰囲気であった。

コタキナバル警察署での見学では、マレーシア全体やコタキナバルの警察官の人数や警察の仕事について詳しく話を聞くことができた。子どもたちは服装に目を付け、バッジやヒジャブ（女性のスカーフ）などについて尋ねるなど、積極的に警察官に質問する姿も見られた。施設見学では、留置所を見せていただいた。駐車場では、パトロールカーやバイクの装備について説明してくださったり、実際に乗せていただいたりした。到着早々、応接室に案内され朝食を用意してくれたことには驚いた。

見学を通して、子どもたちにとって、警察官が身近に感じられ、私たちの安全を守ってくれていることを実感できるようになった。

(3) お菓子工場見学

コタキナバルのあるサバ州では、カカオ生産地であることからチョコレート工場の見学を行った。見学した工場は小規模ではあるが、コタキナバル市内にある様々な外資系のホテルや空港等に出荷していることを教えていただいた。また、サバ州で収穫したカカオからチョコレートを作る工程の説明を聞いたり、実際に作る

様子を見学したりすることもできた。子どもたちは、美味しいチョコレートを作るための工夫や衛生面の工夫などについて積極的に質問する姿が見られた。このチョコレート工場見学では、実際にチョコレート作りや梱包体験をさせていただくだけでなく、お土産もいただいた。

(4) スーパーマーケット見学

スーパーマーケット見学では、日本人を含め外国人が多く住むリカス地区にあるCity Gourmetを見学場所に選んだ。日本のスーパーマーケットで見られるような店舗としての工夫に加え、日本を含む多国籍の商品を多く揃えていたり、ムスリムの人に配慮したコーナーがあったりするなど、日本ではあまり見ることができない工夫などにも気付くことができた。

また、日本では惣菜コーナーをよく見かけるが、コタキナバルでは外食する人が多いため、惣菜コーナーは充実していないことも分かった。コタキナバルには大手日系スーパーマーケットがなく、日本のものが手に入りにくい環境であり、日本で比較的気軽に購入できるものがマレーシアの他の地域に比べても高価になっていることも改めて知ることができた。



梱包体験の様子

(5) パッカー車（塵芥車）見学

日本の教科書では、可燃ごみが焼却場で処理されることや細かに分別されリサイクルされていることを学習するが、コタキナバルには焼却処分場がなく、排出したごみは全て埋め立てている。そのため、多くの場所でごみの分別はない。一部コンドミニアムやショッピングモールではごみの種類ごとにごみ箱が用意されているが、結局同じ場所に運ばれ埋め立てているのが現状である。そのため、市民の環境に対する意識も高いとは言えず、道路脇や海岸を歩くと多くのごみが落ちている。教科書で学ぶことと、生活上の実際が大きく異なるため、この学習が子どもたちの環境への意識を高めることができるかが心配ではあったが、パッカー車見学を通して、コタキナバルでのごみのゆくえやごみ処理で働く人の苦労や願いを聞き、ごみを減らしていく努力をすることが大切であるという考えを持つことができた。

パッカー車は日本よりも大きく、見学した場所では決められた場所に自分でごみをパッカー車に入れるという仕組みになっていて、収集方法についても日本との違いを知ることができた。

4 おわりに

コロナ禍により、これまで継続的に行なっていた社会科見学が中止になり、関係諸機関とのつながりが一度途切れてしまった。そのため、改めて見学場所を開拓していく必要があった。日本とマレーシア、そしてコタキナバルで、公共施設等の仕組みや規模等、違いも多くあるが、中学年の社会科は地域に密着する単元が多くあることから、実際に見たり聞いたりできる体験活動を重視させたいと思い、現地教員に聞くなどして見学場所を探していった。あわせて、見学のねらいや内容について、施設スタッフに説明する等、事前準備も現地教員に手伝ってもらいながら進めた。見学の計画を立てる際には、子どもたちに学ばせたい内容が必ずしもマレーシアでは一致しないことがあったり、日本と比べると進んでいないこともあったりしたが、否定につながらないように説明の仕方を配慮するようにした。事前準備に苦労したが、実際に見学したときには、子どもたちの目が輝き、進んで見たり聞いたりして多くのことを学び、日本との相違点にも気付いている姿から体験活動を計画してよかったと感じた。また、興味

を持ったことや不思議に思ったこと、聞いてみたいことを積極的に質問する姿もたくさん見られた。ただ、施設スタッフの中には英語が通じない方もおられるので、その際は、子どもが日本語で質問し、私が英語に通訳し、現地教員がマレー語に通訳する。施設の方がマレー語で回答し、現地教員が英語に通訳し、私が日本語に通訳する。このように1つの質問で、複数の言語でのやり取りが必要となることがあり、質疑応答に時間が掛かってしまったことは課題である。

派遣期間に多くの社会科見学を実施したが、どの施設の方も日本人学校そして外国人である日本人に対し、温かく受け入れてくださり感謝している。様々な方の協力があって、充実した教育活動が成り立っていることを実感することができた。日本に帰国してからもつながりを大切にし、子どもたちにとってよりよい学びの場を提供できるよう研鑽を積んでいきたい。